The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の複合動詞研究の回顧と再考
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 99-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の複合動詞研究の回顧と再考*

由本　陽子

1.　はじめに

「動詞＋動詞」型複合動詞は、世界の言語の中でも南アジアの諸言語に特に集中して存在しているようであるが、中でも日本語の複合動詞はその生産性と多様性において卓越しており、これまで多くの研究者の関心を集めてきた（cf. 影山 (2013)）。特に焦点とされてきたのは、二つの動詞の結合関係である。伝統的な国語学では、後項動詞(以下V2)がアスペクトなどの意味を前項動詞(以下V1)に付加するという関係のものが多いことが早くから認められ、このようなV2は広く「補助動詞」と呼ばれてきた。また、V1V2が単独で用いられる場合とほぼ同じ意味と統語的性質を保持しているかという観点からは、以下の４つに分類された（保持しているものをV、していないものをvとして表している。(寺村1984:167)）。

(1) a. V-V: 呼び入れる、握りつぶす、殴り殺す、ねじ伏せる、出迎える
　b. V-v: 降り始める、呼びかける、思い切る、泣き出す
　c. v-V: 差し出す、振り向く、引き返す
　d. v-v: 払い下げる、（話を）切り上げる、（仲を）取り持つ、（芸を）仕込む

このような二つの動詞の結合関係に焦点を当てた研究に対して、生成文法的アプローチによる語形成論の知見を活かして、「語彙的緊密性」の違いから、日本語の複合動詞形成には二種類のメカニズムがあることを主張したのが影山(1993)である。すなわち、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別である。この主張により、意味的・統語的、それぞれの観点から様々な分析が示され、複合動詞の理論的研究が大きく前進したことは間違いない。

しかし、近年、この大前提であった二分類が揺らいでいる。すべてが統語部門で作られるとする統語的アプローチ（Nishiyama (1998)、西山・小川(2013)、斎藤(2014)など）が分散形態論の発展とともに強力に推し進められるのと並行して、影山(2013)自身が、従来の二分類の中間に位置づけられる語彙的なアスペクト複合動詞というカテゴリーを認める立場をとり、自身が提示していた語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分類する基準を覆すような主張をしているのである。本稿では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いを改めて確認し、このような近年の動向について検討してみたい。

---

*本稿は平成 29 年度科学研究費補助金基盤(B)（17H02334 研究代表者：由本陽子）の援助を受けて行った研究成果の一部である。本稿は、2018 年 2 月 9 日立命館大学言語教育情報研究科にて行った講演の内容に一部手を加え発展させたものである。

2. 語彙的複合動詞における意味の不透明性

最初に注意したいのは、語彙的複合動詞は語彙部門の規則によって作られるものであるいっぽうで、大部分が心内辞書に記憶される「語」であることである。二つの動詞の意味関係は多様だが、決して何の規則も制限もなく結合しているのではない。特に生産性を保持している意味合成のパターンは、心内辞書に蓄えられている動詞の意味構造に則ったものである（cf. 由本(2005)）。先行研究で広く認められている生産性の高い複合パターンとして、(a)V1が付帯状況や様態を表すもの（e.g. すすり泣く、はい寄る、持ち寄る、待ち暮らす）、(b)V1が手段を表すもの（e.g. 切り倒す、吸い取る、泣き落とす、言い負かす）、(c)V2が補助動詞的な役割をするもの（e.g. 晴れ渡る、練り上げる、沸き返る、居合わせる）があるが、(a)(b)は単一動詞の意味構造にも一般に見られるものである。(a)(b)による複合動詞の意味を概念構造(LCS)で示せば、それぞれ(2)(3)のように表されるが、このような意味構造は、(2)のタイプは移動様態動詞（e.g. 走る、這う、泳ぐ）、(3)のタイプは特定の道具の使用が含意されるような動詞（e.g. 掃く、縫う、塗る）に与えられるものと同じである。[1] (c)については、4節で詳しく扱い本節では触れないこととする。

(2) (a)タイプ V1+V2 → ([LCS2] / WHILE [LCS1])　　(3) (b)タイプ V1 + V2 → ([LCS2] / BY [LCS1])

この2種ほど生産性はないが、由本(2005)である程度生産性があるものとして提示された(d)V1が原因を表すタイプ（e.g. 泣き濡れる、凍え死ぬ, 飲み潰れる）についても、そのLCS(4)は「溺れる」「酔う」「焦げる」などの単一動詞と同じ意味構造が想定される。

(4) (d) タイプV1 + V2 → ([LCS2] / FROM [LCS1])

以上のように動詞の意味関係に複数の可能性がある事実は、上記のような意味構造を介さずして捉えることはできない。たとえば、西山・小川(2013)や斎藤(2014)の統語的アプローチによれば、上記のいずれの意味関係であってもすべてV1とV2が姉妹関係で結合する統語構造が想定されるため、構造からは適切な解釈が導かれず、また、上記のような意味関係の複合は生産性が高い理由も説明できない。さらに、それぞれの意味関係によって意味的制約があることが、由本(2005)で指摘されている。たとえば、(a)については、V1が継続相でなければならない（「*倒れ落ちる」、「*売り暮らす」、「*溶け流れる」）が、(b)についてはそのようなアスペクトにおける制約はない（cf.「あぶり出す（V1は継続動詞）」

[1] 日本語に比べて英語においては、いずれのタイプの意味構造をもつ単一の動詞も非常に多い。移動様態動詞は豊富に存在するし、また、道具を表す名詞がそのまま動詞として用いられる（e.g. brush, comb, hammer, saw, ship, etc.）場合も非常に多い。日本語には複合動詞形成という方策があるが故に、単一動詞にそのようなものがそれほど豊かではないと考えられる。

vs. 「突き出す（V1は瞬間動詞）」）。また、(b)の中でLCSの合成において使役の連鎖が成立する組み合わせ、すなわち、V1が表す働きかけの対象がV2における対象と同定される組み合わせの生産性が高く数多く存在するのに対し、「泣き落とす」「笑いとばす」のようにV2の目的語がV1が表す事象において明確な項としては認められない組み合わせは少ないという事実なども、動詞の複合を意味合成によって捉えなければ、説明は難しいだろう。[2]

このような二つの動詞の意味関係の多様性に加えて、心内辞書内の特に語彙範疇に属するものには、一般に「名づけ」機能があることにも注意したい。つまり、単に二つの語彙を結合して一つにして表すのではなく、「名づけ」に動機づけられた語形成が行われているのである。それが故に、多くの場合意味が不透明化する。複合名詞を例に説明すると、「花見」「金貸し」は、パラフレーズすれば「花を見る」「金を貸す」に対応し、生産性的な語形成規則に従って作られたものではあるが、それぞれ桜を見て楽しむ行事と金を貸し利息をかせぐ商売、またはその職業の人の呼び名である。このような意味の不透明化は「語彙化」と呼ばれる。[3]以下のような複合が容認されないのは語彙化によって説明される。

(5) a. 夏休みにニッコウキスゲが咲いている高原に｛花を見に／*花見に｝行った。
b. ??健は弘の金貸しだ。

語彙的複合動詞にも語彙化は認められ、(6a)のように透明な意味と特殊化した意味があり多義のものもあれば、(6b)のようにV1が原義からは離れた意味で複合語を形成しているもの、また、(6c)のように特殊化した意味でのみ用いられる場合も多い。(6c)におけるV2については、どんな文脈を作っても、落下、停止、回転、のような原義で用いることはできない（cf. *彼が面白い話をしたので、そばに積んであった書類を笑いとばしてしまった。）。

(6) a. 洗い出す、洗い直す、汲み取る、歩み寄る、射止める、掻き乱す
b. 取り消す、取り交わす、差し入れる、差し戻す、掻っ払う、掻っさらう、吹っ切る
c. 泣き落とす、食い止める、着まわす、笑いとばす

注目すべきは、(7)の例で、目的語、あるいはそれ以外の補部として、V1が選択する名詞を表すことがない点である（cf. (8)）。[4]「飲む」「言う」は特定の目的語については文脈から解釈可能な場合省略され得るのだが、語彙的複合動詞では必ず省略され、統語的複合動詞においては、(9)に示すように必ずしも省略されないし、それ以外の目的語もとれる。

---

[2]二つの動詞の意味合成における意味的・形態統語的制約を明らかにした詳しい分析については、由本(2005)を参照されたい。

[3] Lieber (2010)はこのような語彙化のプロセスについて、次のように定義している。
"The process by which complex words come to have meanings that are not compositional."

[4] 詳しくは由本(2005)を参照されたい。

(7) 飲み歩く、飲みつぶれる、言い寄る、言い負かす、言い逃れる

(8) a. 先生を言い負かす。／*先生に意見を言い負かす。

b. 太郎は飲みつぶれてしまった。／*太郎はウィスキーを飲みつぶれてしまった。

(9) a. 太郎は花子に言い過ぎたことを後悔した。／太郎は花子に｛意見を／お世辞を｝言い過ぎたことを後悔した。

b. 太郎は飲み過ぎて胃を壊した。／太郎は{酒を／水を}飲み過ぎて胃を壊した。

以上のような語彙的複合語の「語彙化」に関わる観察は、統語的アプローチによる分析においては、看過されてしまっているようである。

3. 語彙的複合動詞における「形態的緊密性」

欧米語を中心とした形態論において、「語」と「句」の区別においてもっとも重要な性質は「形態的緊密性」である。これはLieber (2010)によれば、以下のように定義されている。

語の形態的緊密性 (lexical integrity)　（語彙的緊密性）

“The hypothesis that syntactic rules may not create or affect the internal structure of words.”

本節では、語彙的複合動詞には確固たる緊密性が確認できるのに対して、統語的複合動詞においては、それが部分的にしか観察されないことを見ておこう。影山(1993:76-77)では、日本語複合動詞の形態的緊密性をテストするいくつかの現象が示されており、以下の二つのテストについては、いずれの複合動詞においても形態的緊密性が確認されている。

① 機能範疇（統語的な要素）は、原則として語内に現れない。

(10) a. *飛びモ上がる、*泣きモ叫ぶ、*歩きモ回る　【語彙的】

b. *食べモ続ける、*しゃべりモまくる、*食べモかける　【統語的】

② 重出する語の一部を削除することはできない。

(11) a. *その夜、兄は神戸で飲み~~歩き~~、弟は大阪で食べ歩いた。【語彙的】

b. *ちょうと同じ時に、姉は本を読み~~終え~~、妹はレポートを書き終えた【統語的】

(10)は副助詞が複合動詞の中に介在できないことを示している[5]。(11)は、複合動詞のうちV2が重出している場合、削除してしまうと、もとの解釈が得られないことを示している。

いっぽう、語彙的複合動詞にのみ緊密性が見られ、統語的複合動詞においては、二つの動詞が必ずしも一塊の結束性を有さないことが示唆される現象もある。まず「語彙照応の制約」が成立しているか否かである。これは、「語の一部分だけが文中の照応に参加することはできない」という制限のことである。

③ 語彙照応の制約が成立する。

[5] 影山(1993)は「モ」を副助詞としているが、正確には係助詞である。

(12) a. *太郎が遊んでばかりいるのを見て，次郎もそうし暮らした。
b. 太郎がまだ走っているのを見て，次郎もそうし続けた。

ここで注意すべきは、「そうする」は意図的行為にしか用いられないということである。語彙的複合動詞も統語的に形成されるとする西山・小川(2013:16)では、影山によれば統語的複合動詞とされるものの中にこのテストにパスしないものがあり、語彙的複合動詞との区別が判然としないという批判があるが、そこで指摘されているV2は「忘れる、そこなう、そびれる、遅れる、つける」などほとんどが意図性を欠くものである。V1が意図的行為でもV2に意図性が認められない場合、このテストにはパスしにくいようである。

次に、複合している二つの動詞が、統語構造においては個々に生起していることを示すテストとして、V1のみの主語尊敬語化、受身化が挙げられている。統語的複合動詞においては、V1にのみ文法的操作を適用したり、文法的な要素を付加したりすることが可能だからである。ただし、構造上の理由（影山 (1993:149-151)）と意味的理由（由本(2005:178)）によって、統語的複合動詞のすべてにおいてこれらの操作が可能とは言えないので、V1の主語尊敬語化や受身化が容認されないからといって語彙的複合動詞だという判断にはならないが、少なくとも、それらが容認されるものは、間違いなく統語的複合動詞である。(13)は主語尊敬語化、(14)は受身化における両者の違いを示している。影山(1993)ではとりこぼされている使役を表す「させ」についても(15)に示すように同様の差異が見られる。

④ V1にのみ文法的操作を適用することはできない。
(13) a. 先生は手紙を｛*お受けになり取った／お受け取りになった｝。
*お泣きになり落とす、*お飲みになり歩く、*お巻きになり込む　【語彙的】
b. 先生は手紙をお書きになり始めた。
お飲みになり続ける、お食べになり過ぎる、お乗りになり損ねる　【統語的】
(14) a. 注意が｛*書かれ込んであった。／書き込まれてあった｝。
*ドアが押され開けた。*シミが吸われ取った 。　【語彙的】
b.昔の歌が歌われ始めた。日記が書かれ続ける。男が殴られかけた 。【統語的】
(15) a. 先生は生徒に単語を｛*書かせ取った／書き取らせた｝。　【語彙的】
b. 医者は患者に薬を｛飲ませ始めた／飲み始めさせた｝。　【統語的】

また、影山(1993)によれば、いわゆるサ変動詞は、動名詞と軽動詞「ス(ル)」が統語的操作によって結合したものと分析され、ゆえに語彙的複合動詞のV1として生起することはない。

(16) a. *接着し付ける、*沸騰し立つ、*吸引し取る、*署名し交わす　【語彙的】
b. 見物し続ける、勉強し始める、 投函し忘れる、 紹介し合う　【統語的】

最後に影山(1993)は、彼が統語的操作によって派生すると考える動詞重複、すなわち、「飲みに飲む」のような形式が統語的複合語においてのみ許されることを指摘している。

(17) a. *行方不明の子供を探しに捜し歩いた。*子供たちに愛情を注ぎに注ぎこむ。【語彙的】
b. 大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。鍛えに鍛え抜かれた身体　【統語的】

このテストについては、近年影山自身が反例を挙げており、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別として有効ではない可能性がある。この点については次節で取り上げる。

4. 語彙的複合動詞における埋め込み構造

影山(1993)では、二つの動詞が補文関係によって結合する語彙的複合があることが指摘され、由本(2005)では、これを[LCS2 …[LCS1]…]のような埋め込み構造によって表した。「書き落とす」を例として取り上げれば、(18)のように「書く」のLCS[[x] CONTROL [[x] WRITE [z]]]が不履行を表す「落とす」のLCSの項として埋め込まれた形で表すことができる。

(18)　xがyを書き落とす：[[x] CONTROL [[x] WRITE [z]] + [[x] FAIL [IN [$_{Event}$ [y]]] ⇒
[[x_i] FAIL [IN [$_{Event}$ [y_i] CONTROL [[x_i] WRITE [y_j]]]]]

由本の分析では、原則としてV2の原義と同じか比ゆ的拡張によるLCSが利用されると想定されたが、実際は、V2が原義をほとんど失っているものが多い。そしてその多くがアスペクト（「～止す、～果たす、～しきる」）や強調（「～返る、～払う、～上がる」）などの意味をV1に添加するだけのようにみえる。そこで、日本語学では、これらが広く「補助動詞」と呼ばれている。たとえば、寺村(1984)では、「住みつく」における「つく」、「流し込む」などの「こむ」は移動を、「走り込む」などにおける「込む」は完成、強さを表すものだが、いずれも補助動詞であるとされている。同様に、同じ「かける」でも「食べかける」「動きかける」では開始を表し、「人に話しかける」においては「目標に向かっての動き」を表すというように意味は異なるが、いずれも補助動詞に分類できると述べている。しかし、影山(1993)のテストに照らせば、前者の「～かける」は統語的、後者は語彙的複合動詞だと判定される。影山(ibid.:94)が指摘するように、意味的判断にのみ基づいた補助動詞という概念は日本語の複合動詞の本質を正確に捉えているとは言えないのである。

ところが、近年影山はこの日本語学の「補助動詞」という概念を復活させるかのごとく、語彙的複合動詞の中に、2節の(a)(b)(d)に挙げた「主題関係複合動詞」とは区別して「アスペクト複合動詞」というカテゴリーを認め、このタイプに現れるV2はアクツィオンスアルトの抽象的な概念をV1の意味の外側に添加するだけのものだという主張を展開している(影山 2013, Kageyama 2016)。具体的には(19)のようなものがこのタイプに分類される。

(19) 降り止む、練りあげる、書きあがる、寝込む、冷え切る、静まり返る、降りしきる、
さびつく、使いこむ、建て替える、いじくりまわす、殴りかかる、晴れ渡る

このカテゴリーを認める根拠として影山は以下の5点を挙げている。①V2が項関係（格関係）を決定する機能をもたない。②V2の原義が希薄化し、機能的な役割になっている。③V2が主題関係複合動詞の外側につくことができる。（アスペクト複合動詞の外側に主題関係複合動詞を作るV2は現れない）④「VにV」動詞反復が可能。⑤他動性調和の原則が適用しないことが多い。以下で個々のポイントについて検討していく。

まず、①について、影山は、単純に複合動詞の項構造や格標示が二つの動詞のどちらに支配されているかを観察し、主要部の位置にありながら、その支配力をもたないV2はアスペクト複合動詞を形成するものだとしている。たとえば、「子供を叱りつける」において目的語「子供」はV1の目的語であって、V2「つける」の目的語ではない。「太陽が屋根を照らしつける」においても同様のことが言える。したがって、これらの「つける」はアスペクト複合動詞と見なされる。ところが「太陽が屋根に照りつける」においては、「屋根に」は「照る」ではなく「つける」によって選択されている。また、「つける」がとるはずのヲ格目的語が現れないのだが、その理由については、「「照り」の部分が形態的には動詞連用形であるが、意味的には「光と熱」という名詞的な概念を表すため」だとしている。以上により、影山 (2013:17)は「照りつける」は主題関係複合動詞のほうに分類できると結論づけている。しかし、私見では、「つける」の意味はいずれも「[x]が[y]を[z]につける」という原義の項構造を保持しており、V1の表す事象がyに埋め込まれる形での意味合成が想定できる。両者の違いはV1の他動性によって複合動詞に受け継がれる項の格標示が異なることによると考えられる。すなわち「照りつける」の場合は、V1が自動詞なので、yに埋め込まれる事象内には「屋根」に当たる項が存在せず、「つける」のみが選択するz項として「屋根」が具現されている。それゆえ、「屋根」は「つける」がzに付与するニ格で標示されると考えられる。「つける」の目的語にあたる項はV1のLCSによって満たされているので具現されることがない。いっぽう、V1が他動詞「叱る」「照らす」の場合は、埋め込まれる事象内に「つける」のz項と同定される項が存在し、「[太陽]が [PROが<u>屋根</u>$_i$を照らす]を[<u>屋根</u>$_i$] につける」のような意味構造を成していると考えられる。この場合の、「屋根」は同定され、V1, V2いずれの項として具現されるかが問題になるが、「つける」が他動詞であることから、ヲ格標示が選ばれるのではないだろうか。影山の説明は、二つの動詞の関係を形態統語的観点からのみ捉えようとするあまり[6]、同じ動詞の多様な用法を統一的に扱えない。まずは二つの動詞のLCSが合成し、それをもとに複合動詞の項構造とそれぞれの項の具現形式が決定されていくとする仮説に従えば(cf.由本(2005))、むやみに語彙項目を増やす必要なく説明が可能になるのではないか。実際、アスペクト複合動詞でなくとも、V1の項構造や格標示が受け継がれる例は存在する。(20)の例はいずれもV1が様態を表す主

[6] 影山(1993)では、語彙的複合動詞は項構造の合成によって形成されると考えられている。

題関係複合動詞だが、V2には選択されない目的語を選択する[7]。

(20) a. 子供を保育所から連れ去った。
（cf. 子供を連れる、*子供を去る、保育所｛を／?から｝去る）
b. 先生のお宅に手作りのおかずを持ち寄った。
（cf. おかずを持つ、*おかずを寄る、*先生のお宅に持つ、先生のお宅に寄る）

LCSの意味合成を基盤として複合動詞の項構造や格標示が決定されるという分析に基づけば、影山が⑤に挙げている、補文構造タイプの複合においては、「他動性調和の原則」に反する組み合わせが多いことも説明がつく。このことは由本(2005)ですでに指摘したのだが、V1がV2の項として埋め込まれる構造であれば、V2が他動詞でV1が非対格自動詞という組み合わせでも項の受け継ぎにおいては何の問題も生じない。V2の目的語に当たる項がV1によって満たされており、V1が自動詞であるがゆえに複合動詞全体が自動詞になるというケースで、「出払う」「生まれ合わせる」などがその例である。いずれにせよ、影山(2013)の調査では、アスペクト複合動詞で他動性調和の原則に適合するものは71.4%、主題関係複合動詞であっても89.5%にとどまるので、この原則に違反するものがあることがアスペクト複合動詞という異なるカテゴリーを認めることの根拠として十分なものとは言えない。

次に、影山(2013:24)が提案するアスペクト複合動詞の意味表示は(21)の通りである。

(21)「降る」のLCS：便宜上e_1としておく　　「しきる」の意味：INCESSANTLY (e)
「降りしきる」の意味：e_1 & INCESSANTLY (e_1)

彼が②を根拠として提案するのは、アスペクト複合動詞を作るV2にはLCSではない形式で表示される特別の語彙項目があり、複合における意味合成はV1のLCSにそれが単に添加されるとする分析である。これに従えばこのタイプのV2には項構造も格素性もない。しかし、先述の項の受け継ぎや格標示に関する事実を踏まえれば、この種のV2にもLCSや格素性があると考えるほうが良いと思われる。実際、アスペクト複合動詞に分類されるであろうものでも、項の格標示や項の選択素性がV1ではなくV2に支配されている例は見つかる。[8]

(22) a. 自転車｛を／*に｝乗り回す、電車｛を／*に｝乗り換えた　（cf. 電車に乗る）
b. 少女｛に／*を｝殴りかかる　（cf. 少女を殴る）
c. 鐘の音が会場に鳴り渡った　（cf.会場｛*に／で｝鐘の音が鳴った)

[7] LCS における意味合成と項の同定の後、各項がどのように具現されるかについては、二つの動詞の関係によって多様である。詳しくは由本(2005)を参照されたい。
[8] そういうものは主題関係複合動詞だと言うならば、その意味構造を明確にする必要がある。

また、アクツィオンスアルトを表すと考えられるV2の中にも、原義を保っているものもある。「～逃す」「～交わす」などである。また、この「～交わす」については、(23)に示すとおり、具体物を目的語にとる用法(23a)から動名詞目的語用法(23b)、さらには複合動詞を作るV2としての用法(23c)へと拡張していることは明らかである。同様のことがやや原義から離れている「～かける」にも観察できる。LCSによる分析では、たとえば、(24a, b)に示すように、いずれの「～かける」についても、統一的な意味合成を想定することができる。

(23) a. ことばを交わす、契約書を交わす、ことばをかける
b. 握手を交わす、挨拶を交わす、夜襲をかける、誘いをかける
c. 挨拶を言い交わす、猫が鳴き交わす、敵に攻めかける、女に話しかける

(24) a. x がz に{毛布／ことば}をかける：
[[x_i]CAUSE[BECOME [$_{Thing}$ BLANKET/WORD] BE[ON [z_j]]]]
b. x がzに｛夜襲/誘い｝をかける⇒ x がzに[攻め]かける：
[[x_i]CAUSE [BECOME [y] BE [ON [z_j]]]] （V2の原義に基づくLCS）
↑ 代入
[$_{Event}$ [x_i] ACT ON [z_j]] （V1のLCS）

これらのV2が複合動詞を作る用法について(21)のような形式の意味表示を与える分析では、以上のような観察を説明することは難しいだろう。また、西山・小川(2013)はアスペクト複合動詞を作るV2を助動詞として扱い、統語構造上でV1と結合すると考えているが、この分析にも同様の問題がある。(24b)に示した動名詞を目的語とする用法と複合動詞のV2としての用法の連続性は、上に示したような分析でしか捉えられないだろう。[9]

次に、③の例としては、影山(2013)では「寝静まり返る」「干からびあがる」「追い掛け回す」「鳴り響き渡る」がその例として挙げられているが、このような重層構造をなす複合動詞はそう多くない。影山(ibid.)や西山・小川(2013)が主張するようにアスペクト複合動詞を作るV2が普通の語彙的複合動詞より一段上の階層、あるいは別の投射内に位置づけられ、しかも抽象的な概念を添付する補助動詞的なものであるなら、もっと自由に様々な複合動詞の外側につけられてもよさそうなものである。この点も再検討が必要である。

最後に④であるが、影山(1993:90)によれば、動詞重複は統語部門の操作による。その根拠として「なぐられになぐられた」「読ませに読ませた」のように受身形と使役形でも可能であることが指摘されている。この分析が正しければ、動詞重複を許すものは統語的複合動詞という判断になるはずである。ところが、影山(2013)では、動詞重複は語彙的アスペクト複合動詞を主題関係複合動詞から区別する十分条件と見なせると述べる(ibid:32)いっぽうで、アスペクト複合動詞はあくまでも語彙的複合動詞の一部であると主張している(ibid:44)。これらの主張には、明らかに矛盾がある。動詞重複が統語的操作によるのであれ

[9] V1 の目的語「敵」が「かける」との複合によりニ格標示されている点にも注意されたい。

ば、アスペクト複合動詞に見られる動詞重複がどのようなメカニズムによっているのかを明らかにする必要がある。この構造的な問題については、現時点で解決案を見いだせないが、影山(1993)が述べるように動詞重複は行為・動作の反復、継続を表すことから、付帯状況や手段、原因を表すものとして複合しているV1においては、その意味的な動機づけが考えにくく、いっぽう、アスペクト複合動詞においては、V2自体が継続や強調を表す、または、完遂を表すがゆえにV1の継続や反復を前提として想起しやすい、という理由から動詞重複の動機づけが得やすいということは言えるのではないかと考える。

5. むすび

以上、影山(1993)で提示された語彙的複合動詞と統語的複合動詞の差異を再確認したうえで、近年の複合動詞研究において提案されているアスペクト複合動詞という新たなカテゴリーを認める分析と統語的アプローチにより、語彙的複合動詞の統語的・統語的性質に説明を与えようとする分析を検討し、それぞれの問題点を指摘した。

影山(1993)の提案は、従来の日本語学における複合動詞研究だけでなく、語形成論にも重要なパラダイムシフトを起こすものであった。確かに残されている問題は多々あるが、だからと言って、語彙部門の原理下にある語形成規則と統語構造を基盤とした語形成とを区別するモジュール語形成論の妥当性が失われるわけではないし、その問題を解決すべく、両者の区別を不明瞭にするような新たなカテゴリーを設けるのは拙速のように思われる。今一度統語と意味の両面から日本語複合動詞についてのデータを再整理し、事実に対してできるだけ統一的で原理的な説明を与えられる分析とはどのようなものなのか、再検討しなければならない。

主な参考文献

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.

影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系：その理論的・応用的意味合い」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』1-46. ひつじ書房.

Lieber, Rochelle. (2010) *Introducing morphology.* Cambridge: Cambridge University Press.

Nishiyama, Kunio. (1998) "V-V compounds as serialization," *Journal of East Asian Linguistics.* 7:175-217.

西山國男・小川芳樹 (2013) 「複動動詞における助動詞化と無他動性」遠藤善雄（編）『世界に向けた日本語研究』 103-133. 開拓社.

斎藤衛 (2014) 「複合動詞の形成と選択制限：他動性調和の原則を手掛かりとして」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』207-233. ひつじ書房.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語：モジュール形態論から見た日英語の語形成』 ひつじ書房.